佐野鼎

日本一の東大進学校を創った加賀藩士

日本一の東大進学校である開成高校を創った男は加賀藩士だった。名を佐野鼎という。使節の一員として渡米し、世界を一周した。維新後、高校を含む開成学園の前身である「共立学校」を創立し、近代国家の礎となる人材育成に情熱を注いだ。近年、研究会が発足し、人物像が見え始めた。

1862(文久2)年、パリで撮影された佐野鼎の肖像

NY紙が「最も聡明」と絶賛

米国視察の成果、教育に

作家・ジャーナリスト　柳原　三佳

「開成学園」といえば、東大進学率ナンバーワンの優秀な進学校として知られています。その学校の創設者・佐野鼎が、私の母方の分家筋の先祖だということを知ったのは、中学生の頃でした。

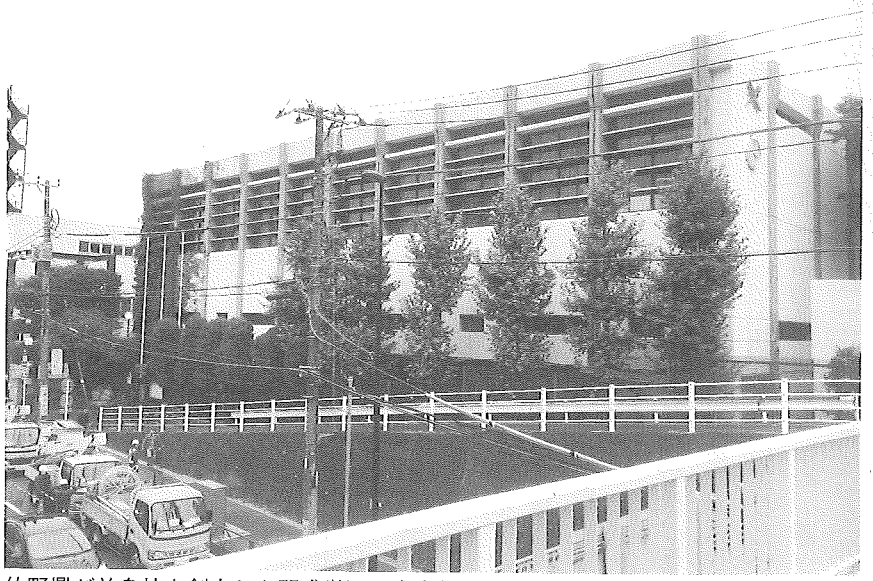
祖父からは、「うちのご先祖の中に、幕末、蘭学や砲術をやっていた人がいてね。船で海を渡って外国へ行き、勝海舟や山岡鉄舟とも親しかったそうだよ」

そんな話をよく聞いていたのですが、当時、それ以上のことはほとんど知りませんでした。ただ、肖像写真に残るその横顔は、明治生まれの祖父にとてもよく似ており、直系ではないものの「やはり血はつながっているのだなあ……」と親近感を覚えずにはいられませんでした。

加賀藩の砲術師範に

佐野鼎は幕末、西洋砲術や洋学の専門家として活躍した人物です。

生まれは駿河国水戸島村（現在の静岡県富士市）。16歳のときに江戸へ出て蘭学や砲術を学び、27歳で長崎海軍伝習所に参加、1857（安政4）年、29歳のときに加賀藩から声がかかり、砲術師範として召し抱えられました。



佐野鼎が前身校を創立した開成学園＝東京都荒川区

その後、幕府が派遣した遣米使節団や遣欧使節団に加わり、アメリカ、ヨーロッパ諸国の主要都市を訪問し、帰国後は加賀藩唯一の海外渡航経験者として、藩主からも一目置かれ、さまざまな場面で意見を求められたようです。

七尾にイギリスの軍艦が現れたときには、すぐさま駆けつけて外交交渉にあたり、外国から陸蒸気器械類や軍艦を輸入する場面でも、その語学力や交渉力を生かして奔走しました。

明治政府に出仕、辞職

維新後は金沢を離れて東京へ戻り、明治政府の兵部省に出仕するものの間もなく辞職。1871（明治4）年、加賀藩の14代藩主であった前田慶寧の協力も得て、現在の開成学園の前身である「共立学校」を創設します。

「有徳有芸ノ全材タル事」（＝学業だけでなく、礼節や道徳を重んじた全人格の形成こそがなにより大切である）という佐野鼎の建学の精神は「開

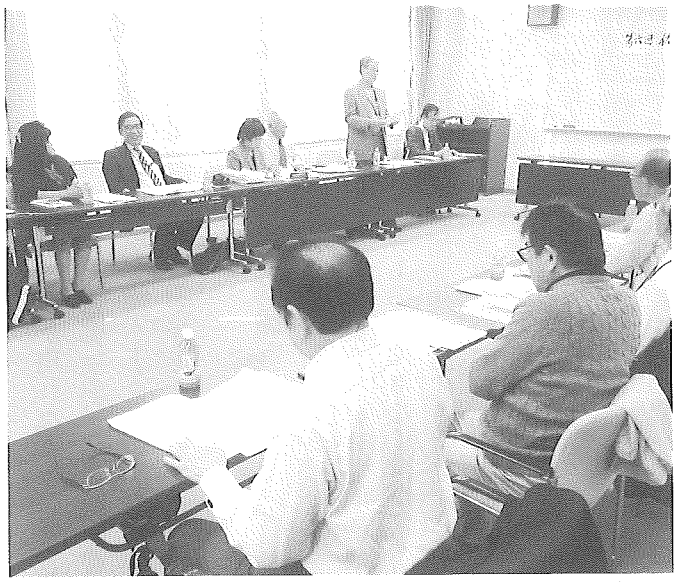
成学園」と名を変えてからも長く息づき、創立以来、多くの逸材を送り出してきたのです。

研究会メンバーが金沢訪問

10月15、16日、「佐野鼎研究会in金沢」が開催され、前金沢ふるさと偉人館長・松田章一さん、元石川県立歴史博物館長・徳田寿秋さん、郷土史家であるフラーシェム・N・良子さんといった、金沢在住の錚々たる先生方のご講演を聴く機会に恵まれました。

東京にある開成学園のOBの方々が中心となって立ち上げられたこの研究会、普段は東京都内で定期的に集まり、研究成果の発表などを行っているのですが、ぜひ佐野鼎ゆかりの地で、講演会と史跡巡りを実現しようということになり、今回、秋の金沢に大集合することとなったのです。

開催両日はお天気に恵まれ、まさに雲ひとつない秋晴れとなりました。金沢城をはじめ、鼎が教壇に立った洋式の兵学校「壮猶館」（知事公舎隣）、家族とともに暮らしていた犀川沿いの角場（鉄砲の射撃場）、そして鼎の実父が葬られたという寺町の妙法寺など、幕末にこの地で過ごした彼の足跡を巡りながら、散策できました。



金沢で初めて開かれた「佐野鼎研究会」。地元研究者3氏が発表した＝2016（平成28）年10月、金沢ふるさと偉人館

きっかけは一冊の古書から

私が、佐野鼎に関する調査に本腰を入れ始めたのは、インターネットのサイトで見つけた一冊の古書との出会いがきっかけでした。

タイトルは、『佐野鼎遺稿　万延元年訪米日記』。終戦の翌年にあたる1946（昭和21）年、「金澤文化協会」から発行された本です。

万延元年といえば1860年、明治維新の8年前です。この頃日本では、開港を求める諸外国との和親条約や通商条約が次々と結ばれていました。しかし、外国人を排斥しようという「攘夷論」も強まり、外国人への襲撃事件や尊王攘夷派の志士たちによるテロ事件が続発していました。

そのような不安定な時代に、なぜ佐野鼎はアメリカへ渡ることができたのか？　インターネットでその本の表紙を見ただけで、私の中に疑問が湧いてきました。

ところが、発行からすでに70年経っている希少な本とあって、この本には当時の定価（10円）をはるかに上回る、数万円の高値がついていました。どうしようかと悩んでいると、母から、「お母さんも半分援助するから買ってみれば？」という助けの手が入り、私は思い切ってその古本を購入することにしたのです。

外国の地名が次々と登場

数日後、手元に届いたそれは、決して状態の良いものとは言えませんでした。戦後の物資不足によるものでしょう、わら半紙のような粗悪な紙に活版で印刷されたもので、表紙も中のページもかなり日に焼けています。しかし、色あせた表紙とは裏腹にその内容は鮮烈なものでした。目次には、

「横濱港を出でて太平洋に浮かぶ」
「ホノロロ港よりメールス島に至る」
「サンフランシスコ府に赴く」
「パナマ港よりアスペンヲール街へ」
「ニウヨルク港口より引返してパトマツク河を

使節一行が泊まったウィラーズホテルは今も当時の姿をしのばせる（筆者撮影）

遡上（そじょう）す」

「ワシントン府に上陸してウイルライト・ホテルに入る」

「分析に因る日米金銀貨の比較」

といった項目が並び、続いて、ヒレドルヒア（フィラデルフィア）、ポルトガランデー（ポルト・グランデ＝西インド諸島のサン・ビセント島の港）、ローアンダ（ルアンダ）、喜望峰、バタービア（バタビア）、香港、といった外国の地名が次々登場するのです。タイトルには「訪米日記」とあるものの、彼が足を踏み入れたのは、アフリカ、インド洋、アジアの国々にまで及んでいることがわかりました。

1860年に派遣された万延元年遣米使節団は、「日米修好通商条約」の批准書をアメリカの首都・ワシントンでかわすため、幕府が送り込んだ正式な使節団です。加賀藩士だった佐野鼎は31歳。彼はどうしてもこの使節団に参加し、異国を自らの目で見たかったのでしょう。加賀藩の史料には藩主から許しを得るまでのやり取りを記した興味深い記録も残されていました。

幕臣の「従者」として

洋学者としては名を馳（は）せていたものの、武士としては下級の身分だった鼎は、念願かなって幕臣の「従者」という立場で使節団に加わります。そして、アメリカ側が江戸湾に差し向けた軍艦「ポーハタン号」ほか、2隻の米軍艦を乗り継ぎ、約9カ月かけて地球を一周したのです。

丁髷（ちょんまげ）を結い、大小の刀を携えた侍が、初めて異国に足を踏み入れ、西洋の最新文明に触れる、それはまさにカルチャーショックの連続だったに違いありません。港に迎えに現れた豪華な馬車。矢のように早い蒸気機関車に乗ったときの衝撃。シャンデリアが吊（つ）るされた西洋式のホテルで、初めて使った水洗トイレやシャワー。熱帯で振る舞われた氷入りのオレンジジュースの美味（おい）しさ。ワシントンやニューヨークで受けた市民たちの大歓迎。美しいドレスを身にまとった西洋婦人たちのキッスの嵐……。

日記には各地で見聞きした出来事や、珍しい習慣、風俗について生き生きと、具体的に記されていました。

また、長崎海軍伝習所でオランダ人から最新の航海術などを学んでいた鼎は、その知識を生かし、江戸時代、百万石を誇った加賀藩前田家は、いかにして大藩をコントロールしたのでしょうか。「仕事が一級のものは気配りも一級」「力を発揮できるチャンスを逃すな」など、混迷する社会をたくましく生きるヒントを提示しています。

加賀前田家の処世術
武士が教える、いきる知恵
童門冬二著

●定価1337円（税込み）
北國新聞社
〒920-8588 金沢市南町2番1号
（出版局）☎076(260)3587

航海中の船位、天候、風向きのほか天文学に関する事柄を毎日緻密に記録していました。大砲などの武器や最新の軍事施設等についても鋭く観察し、記述しているのにも驚かされました。

さらに、ワシントン、フィラデルフィア、ニューヨークでは、アメリカの政治や教育、医療、福祉に関する施設も精力的に視察しており、そこで得た情報を今後の日本にどう生かしていくべきか、深く考察しているのです。その視点は常にグローバルなのですが、文章の端々に見られる社会的弱者への眼差しと細やかな心配り、終焉を迎えた幕藩体制に対する抑制の効いた批判に、彼の優しさとまっすぐな強さを見た気がしました。

NYタイムズが取材

一方、アメリカの新聞社は、遠く日本からやってきたサムライたちの姿をこぞって取材し、精巧なイラスト入りで多くの記事を残していました。中でも佐野鼎の知性は特に目を引いたらしく、1860年6月25日付の「ニューヨークタイムズ」には、「ニューヨークにおける日本人」と題して次のように紹介されていました。

「佐野鼎は役人の中で最も聡明な人物の一人で、英語に多大な進歩を示し、情報を得ることにたいそう興味を持っている。彼は土曜日に手話術用のアルファベットを習ったが、彼によれば手話法はまだ日本では知られていないという。彼はガヴァナンス・アイランド（ニューヨーク湾にある要塞）を切に訪れたがっており、また戦術に関するたくさんの書物を探し求めていた。佐野は同じような知性をもった5～6人の随行員とともに、異国の地にあって自分からは何もしようとしない大使を山ほど集めるよりも、日本人たちに我が国に関するはるかに正しい知識を与えてくれるであろう」（訳文は「佐野鼎と共立学校」より抜粋）

しかしこの航海の途中、江戸では桜田門外の変が起こり、大老・井伊直弼が暗殺されます。ワシントンで日米間の条約文書を交わしていたまさにそのとき、日本国内では攘夷の声が高まり、多くの志士たちが命を落としていたのです。帰国した使節団は、混乱する幕府の現状に言葉を失ったことでしょう。せっかく海外で貴重な見聞をしてきたというのに、帰国後、そのことを公に語ることすらできなかったのです。

記念銘板の設置を祝う「万延元年遣米使節子孫の会」一行。
前列左から3人目が筆者

アメリカ人の親切に触れ、進んだ文化を目の当たりにした佐野鼎は、帰国後、崩壊寸前の武士社会に何を見たのでしょう。軍事の専門家として歩んできた彼が、明治の世になって「教育」という道へ大きく方向転換したのはなぜだったのか……。

彼の残した日記をきっかけに、私はいつしか佐野鼎という人物にのめりこんでいました。そして、歴史の隅に埋もれかけていた数々の出来事を掘り起していくうちに、多少なりとも血縁のある子孫のひとりとして、彼の人生をなんとか一冊の本に書き残しておきたいと思うようになりました。歴史の専門家ではない私にとって無謀な試みであることは承知しているのですが、以来、時間を見つけては佐野鼎の足跡を辿る取材旅行に出かけるようになったのです。

ワシントンに記念銘板を建立

2016（平成28）年5月13日、私はワシントンDCのネイビーヤード（海軍工廠）を訪れて

いました。ここは156年前、遣米使節団がアメリカの軍艦「ローノーク号」から降り立った場所です。鼎はそのときのことを『訪米日記』にこう記していました。

「正九つ時（＝正午頃）ワシントン府の上陸所に船を横付けにす。豫て（あらかじめ）合図をテレガラーフ（＝テレグラフ、電報）にてなし置きたること故、迎への者、海岸に出で来る……」

この日、サムライたちの姿を一目見ようと港に殺到したワシントン市民は4千～5千人に上ったそうです。日記には大勢の歩兵や騎兵が一文字に整列し儀礼の姿勢を取って出迎えてくれたこと、条約批准書を入れた箱を先頭に立て、その後ろに日本人使節らを乗せた30台以上の馬車が一列になって行進し、ワシントン市民の大歓声を浴びている様子などが詳細に綴られています。

日本人使節はこの地に到着してから4日後、ホワイトハウスに出向き、ブキャナン大統領に謁見します。そして正使、副使らによって日米修好通商条約の批准書が交換され、無事にその使命を果たしたのです。

実は今回、私がワシントンを訪れたのには大きな目的がありました。会員として参加している「一般社団法人　万延元年遣米使節子孫の会」が、先祖たちがかかわった歴史的な功績を後世に伝えるため、この地に記念銘板を建立したからです。

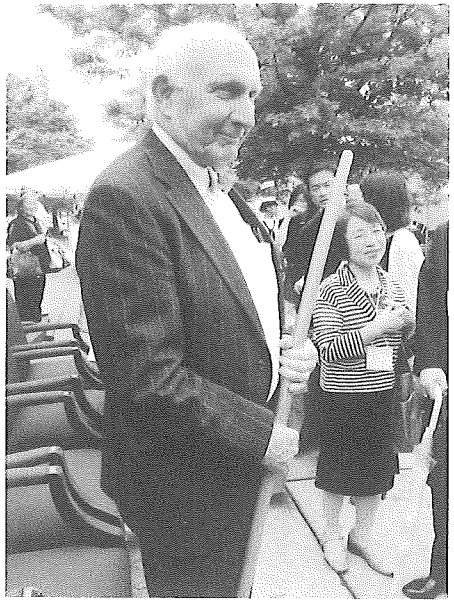
幕末、条約の批准書交換のため、初めてアメリカに派遣された総勢77名の使節たち。この日はその子孫や外交関係者など約100人が集まって除幕式と祝賀パーティーが開かれました。御影石の土台の上に建てられた青銅製の銘板には英文で、「1860年5月14日、日本の使節たちが初めてワシントンの海軍工廠に到着したことを記念する」と刻まれています。

使節団の副使であった村垣淡路守範正の子孫・村垣孝氏（子孫の会会長）は、大手紙の取材に対してこうコメントしました。

「使節団は今の外交の礎を築いた。この間（第2次大戦など）不幸なこともあったが、それを乗り越えてきた。今月、オバマ大統領が広島を訪問する。日米関係が非常に深まっており、記念碑は意義深い」

贈られた白鞘の刀

除幕式には、当時日本人使節たちを親切に迎え入れた米国海軍・デュポン大佐のご子孫も、村垣淡路守から贈られたという白鞘の刀を持参して出席してくださいました。手入れの行き届いた品を見せていただき、今もその絆がしっかりとつながっていることに感銘を受けました。


デュポン大佐の子孫が持参した刀（筆者撮影）

ワシントンのネイビーヤードは、米国海軍の最も古い河岸施設で、米国の史跡、ランドマークとして登録されています。1860年当時、日本人使節たちを迎え入れた建物や、船を修理するドックもそのまま残されており、彼らが目にした古きワシントンの光景を偲ぶことができます。中へ入るには許可が必要ですが、機会があればぜひ訪ねていただければと思います。

日米の条約文書原本を見学

実は今回、私たち子孫の会のメンバーにも、ちょっとしたサプライズがありました。ナショナルアーカイブス（アメリカ国立公文書記録管理局）に特別に入館させていただき、「日米和親条約」など、幕末に日米間で交わされた条約文書の現物を見ることができたのです。

荘厳な石造りの建物は1935年築。荷物検査

やボディチェックの上、何重にも施錠されたドアを開きながら奥へ奥へと進んで行くと、その部屋には、完璧な状態で保管された数々の史料が用意されていました。黒い漆塗りの箱を明けると、その中には金箔が散りばめられた国書に、将軍・徳川家茂の署名がありました。

アメリカ側の書面はいたって普通の便せんでしたが、そこにはペリー、ハリス、そして当時のアメリカ大統領の肉筆サインも書かれています。それらを間近に見ていると、150年以上前に日米両国の外交に携わった人々の息遣いが伝わってくるようで、おもわず鳥肌が立ちました。

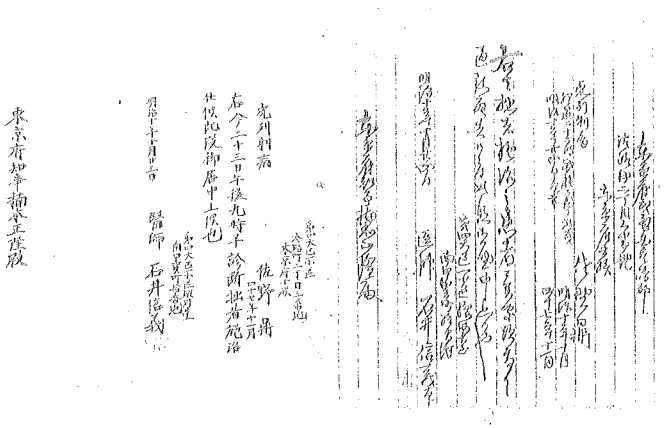
ワシントンで記念銘板の除幕式と史跡巡りを終えた私は、鼎らが辿った道のりと同じく、鉄道を使ってニューヨークへと北上することにしました。当時、鉄道が開通していたのはワシントン～フィラデルフィア間のみだったそうですが、車窓から流れる風景を眺めながら、『訪米日記』の記述がきわめて正確であることに驚きました。町の様子、通過した川の幅、木々の種類などなど、彼の日記に書かれているとおりなのです。

世界的な大都市でありながら、ワシントンDCやニューヨークには、当時彼らが足を踏み入れた公園や建物が至る所に現存していました。戦災や自然災害が少なかったこともあるのでしょう。けれど、歴史や伝統を大切に守り続けている志には感動を覚えました。

49歳でコレラで他界

明治維新後、東京で共立学校を立ち上げた佐野鼎は、1877（明治10）年10月22日、残念ながらコレラに倒れ、49歳という若さでこの世を去ります。東京公文書館で彼の死亡診断書の原本を発見したときには、何とも言えない気持ちになりました。

妻と2人の子ども、そして、創立後間もない共立学校に多くの生徒たちを残したまま、志半ばでこの世を去らねばならなかった鼎はどれほど無念だったことでしょう。コレラという伝染病が死因だったため、身の回りの持ち物は焼却されたという説もあり、佐野鼎の人となりを伝える史料がきわめて少ないのも残念でなりません。しかし、彼が蒔いた「教育」という種は、145年経った今も多くの花を咲かせ続けていると言えるでしょう。



佐野鼎がコレラで死亡したことを伝える書類（筆者提供）

出生地である静岡県富士市、学びの地である東京、長崎、そして砲術師範として活躍した金沢、幕府の使節として訪れたアメリカ、ヨーロッパ……。

佐野鼎の足跡を辿る取材旅行も、いよいよ終盤となりました。今、彼の生きざまをまとめる作業に、懸命に取り組んでいるところです。

本が仕上がったら、彼が眠る東京の青山墓地に、一番に報告に行きたいと思っています。

柳原三佳（やなぎはら・みか）
1963（昭和38）年、京都府生まれ。京都女子大学短期大学部国文科卒業後、雑誌記者を経てジャーナリストに。交通事故・司法問題等をテーマに執筆。著書に「自動車保険の落とし穴」（朝日新聞出版）、「泥だらけのカルテ」「柴犬マイちゃんへの手紙」（講談社）、「家族のもとへ、あなたを帰す」（WAVE出版）、「交通事故被害者は二度泣かされる」（リベルタ出版）など多数。「示談交渉人裏ファイル」（角川書店）はTBS、「巻子の言霊」（講談社）はNHKでドキュメンタリードラマ化。

特集Ⅱ

日本一の東大進学校を創った加賀藩士 佐野鼎

卯辰山に近代都市構想？

病院、救済施設、慶寧に提案か

本誌編集部

駒を動かし、ひっくり返す。さらには取った駒を使う。

日本の将棋のルールを、初めて米国で教えたのが加賀藩士、佐野鼎だった。

1860（万延元）年6月15日、米国東海岸・フィラデルフィアのチェスクラブ。遣米使節団の日本人が2局の模範試合を示した。8マス四方のチェスボードに、もう1マスずつ書き加えて将棋盤に見立てた。

佐野は滑らかな英語を駆使して、駒の動きやルールを、対局を見守る人々に伝えた。メンバーたちは棋譜を書きとめようとした。が、進行が早い。チェスよりも駒数が多く、再利用もあり、駒が裏返ると働きが変わる。チェスクラブの人々は記録が追いつかなかった。

頓知の効くアピール力

30年余り、佐野の足跡を研究してきた金沢市の郷土史家、徳田寿秋氏＝元石川県立歴史博物館長＝が、遊戯史を研究する福井市の医師、布施田哲也氏から教わった逸話である。佐野が帰国後、時の13代藩主前田斉泰に提出した見聞録「奉使米行航海日記」には記されてはいない。

「米国人が初めて目にする将棋のルールを伝えるだけの語学力があった。佐野とほかの外国人との交渉記録を見ても、頓知の効いたアピール力がうかがえる」と徳田氏。

佐野が加賀藩に召し抱えられたのは、1857（安政4）年である。徳川幕府が倒れようとする激動の時代、海外への豊富な知識が何よりも求められていた。

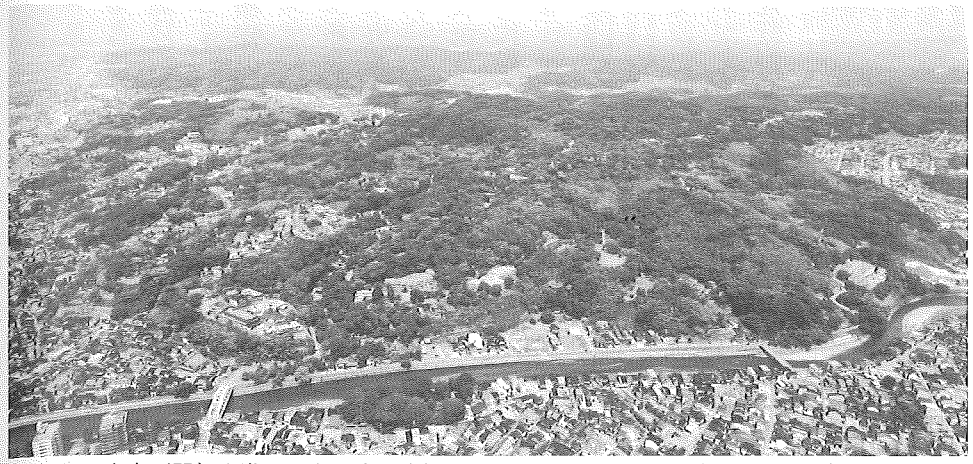
佐野は1870（明治3）年までの13年間、西洋から加賀藩への技術導入に力を尽くした。

米国から帰国した翌年の1861（文久元）年には、幕府の遣欧使節の一員となり、インド洋、スエズ経由でパリ、ロンドン、ベルリン、ペテルブルク（現在のロシアのサンクトペテルブルク）などを巡った。

佐野が執筆した見聞録は、多くの加賀藩士によって筆写され、さまざまな写本があったことが前金沢ふるさと偉人館長の松田章一氏の調査で分かっている。1866（慶応2）年に刊行が始まった福沢諭吉の「西洋事情」に先んじて加賀藩内に世界の様子を伝えたことになる。

加賀藩で佐野が果たした仕事はそれだけではない。

藩が購入した汽走帆船「発機丸」（排水量250トン）を横浜で受け取り、宮腰（現在の金沢市金石）沖まで回航した。幕末の加賀藩が整備した「梅鉢海軍」最初の軍艦となった。洋式兵学校「壮猶館」では、西洋式の砲術を教えた。長崎で



前田慶寧が開拓を進めた卯辰山。金沢に新たな都市を建設する勢いだった（2012年、北國新聞社ヘリ「あすなろ」から）

陸蒸気を購入し、製鉄所で使うための運用責任者に任命されている。まさしく、近代を金沢に連れてきた男だった。

背景に欧米流の社会保障

新式の大砲を採用すべきか。外国が求める七尾の開港問題にどう対処するか。佐野は藩主の信頼があつく、たびたび意見を求められた。外国通のブレーンだったのである。

徳田氏は最後の加賀藩主、14代慶寧が取り組んだ卯辰山開拓に佐野が関わったのではないかと見立てる。

「史料としての裏付けはないものの、間接的に影響を与えたのではないか。米国を訪れた時に、佐野はとりわけ手話に関心を持った。藩が養生所（藩営病院）や撫育所（貧しい領民の救済施設）を整備した背景には、佐野が持ち込んだ欧米流社会保障の考え方がある」

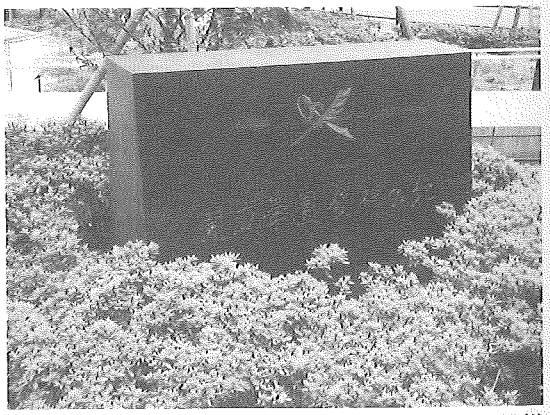
藩政期、入山が禁じられていた卯辰山は、1867（慶応3）年から慶寧の命令により、にわかに開拓が始まった。製油所、製綿所、機場など産業施設のほか、町人向けの教育施設「集学所」、芝居小屋なども建設され、卯辰山に近代的な新都市を築く勢いだった。

しかし、近代を目指した一手は時間切れに終わる。明治維新で加賀藩そのものが崩壊したためだ。東京に移った佐野は一時、兵部省に勤務するが、1871（明治4）年、「共立学校」を東京の神田淡路町の自宅内に創設する。各種の東大合格者ランキングで不動の1位である開成高校、開成学園の前身である。

慶寧らが名を連ねる

開成学園が創立130周年の2001（平成13）年にまとめた小冊子「佐野鼎と共立学校」によると、18人が学校設立に賛同し、元藩主の慶寧をはじめ、加賀藩の江戸での蔵元であった辻金五郎、藩の御用商人であった茅野茂兵衛、佐野の義兄である旧加賀藩士の宇野直作（富有）といった人々が名を連ねた。2階建てで、洋風のバルコニーを備えた洋風の校舎が造られた。「英学」など4科を設け、外国人教師も教壇に立った。

佐野が人材を育てる「教師」を選ぶ目は、折り紙付きだったと言えるだろう。加賀藩時代の佐野は1869（明治2）年、英国人オーズボンを七



佐野鼎の自宅跡に開成学園卒業生が建立した学園発祥の地を示す記念碑＝東京都千代田区の淡路公園

尾軍艦所に招いた。その薫陶を受けて化学者である高峰譲吉や桜井錠二、日露戦争の仁川沖海戦で勝利した海軍軍人、瓜生外吉といった人材を輩出しているからだ。

空白部分、研究始まる

佐野が維新後、なぜ教育に目を向けたのか、その理由ははっきりとしない。徳田氏は「兵部省で下級役人になるよりは、国の基礎を築く人材の育成に努めるべきと考えたのかもしれない」と見立てている。

空白部分を埋める研究は2015（平成27）年、開成学園卒業生らが「佐野鼎研究会」を組織したことで本格化した。

世話人を務める内藤徹雄氏＝共栄大名誉教授、横浜市＝は「開成の卒業生は約2万人。佐野の名前を知っていたけれども、どういうことをした人物なのか知らない人が多い。研究会を開くたびにだんだん関心を持つ卒業生が増えている」と話す。

佐野が1877（明治10）年に死去した後、校長となったのは、高橋是清だった。後に蔵相、首相を歴任する大物ゆえ、創立者である佐野は覆い隠された格好になっていたとも言える。

研究会の現在のメンバーは約30人である。2016（平成28）年10月には金沢で初の研究会を開き、17年3月には佐野の出身地である静岡県内での開催を予定する。学園開設の地である東京、金沢、静岡を結び、人物像を掘り下げる構想だ。

「逡巡した藩」見直す

幕末維新期の歴史研究はこれまで薩摩や長州など「勝った側」からの叙述が主流だった。近年は、会津など鮮烈な「負け」を喫した側の研究も目立つようになってきたが、加賀藩のように、立ち位置を逡巡した藩にまでは及んでいないのが実情という。

徳田氏は「佐野の再評価で、態度を明確にしなかった諸藩の動きを見直そうとする機運が高まることを期待したい」と話す。